

# 22年03月世界市場レビュー

株式会社LOGOSキャピタルパートナーズ  
代表 伊藤 武

2022年3月末主要指数（2022年2月末比）

ダウ工業株平均 34,678.35 (-1.3%)

S&P 500 指数 4,530.41(+0.3%)

NASDAQ 指数 14,220.52 (-0.1%)

日経平均 27,821.43 (+3.0%)

米ドル対円 \121.78 (\115.07)

ポンド対円 \160.12(\154.80)

ユーロ対円 \134.85 (\129.08)

金 \$ 1,940.92(+1.8%)

2月24日に勃発したロシアのウクライナ侵攻は既に一ヶ月を経過し膠着状況に陥っています。和平交渉は模索されているものの、双方の隔たりを解決できるような歩み寄りは期待されていません。先月の市場レビューはウクライナ戦争に焦点をあてその中、世界市場は一進一退の値動きに終始しています。アメリカを中心に株式市場は重なり合う懸念材料に取り囲まれています。

ロシアの無謀なウクライナ軍事侵攻

下火に転じたオミクロン感染後、より感染力の強いBA.2株の襲撃

過熱気味に転じる労働市場

住宅販売の頭打ち

消費者動向の陰り

懸念される利回り曲線動向

エネルギーや資材価格の急騰

ロシアの債務不履行リスク

このように懸念要因は枚挙にいとまがありません。しかしながら前回指摘しました通り地政学的リスクは直接的な経済効果を見極めるまでは中立要因となりがちです。コロナ禍世界株式市場は主要当局の措置により経済活動も早急に修復し、その

中企業収益は巨大IT企業を中心に目まぐるしい増大を実現してきました。景気の支えとなる劇的な過剰流動性があらゆる資産の価値を底上げしています。と同時に発生した過剰流動性、不足する供給能力並びに流通のひずみは結果として40年来のインフレ台頭をもたらせています。アメリカのFRB採用の消費者物価指数は5.4%に達し、目標インフレ率の倍以上となっています。インフレを容易に克服することは困難でしょう。何等かの痛みを伴うこととなるでしょう。状況によっては今後不況をもたらすことも否定できないでしょう。

然るに、今後の景気の舵取りには金融の引き締めは不可欠とならざるを得ません。年初に警告した米国長期金利の指標となる10年国債利回りは一瞬にして2%を突き抜け2.3%台となっています。米FRBの舵取りは正念場を迎えます。基本的にはFRBの操縦手腕に期待し、楽観論は根強く、長期金利の急騰は回避できる見解が主流となっています。

2月後半にポートフォリオ調整をお薦めし、株式の保有比率を最大50%程度まで引き下げることが賢明だとお伝えしました。2つの大きな理由に起因しています。証券市場の見通しを予測することは不可能です。コロナ禍過去2年間、市場見通しは両論が存在し、一部は警戒論が支配してきました。警戒的見解に反し、昨年末まではほぼ中断なくして上昇基調を保持してきました。現時点でも強気・弱気論は拮抗しています。ここで敢えて警戒を発しているのは、市場が上昇を続けるか、下降に転じるかの問題ではなく、リスク要因が相当高まっていると観測しています。そしてもう一つの理由は、次のチャンスを捉えるにはキャッシュの軍資金を備えることが不可欠です。

最後の観察として、円安が進行し、一瞬にして対ドル120円台に転じています。地政学や地球的懸念に対し円は逃避通貨として評価されてきました。しかし世界的な金融政策の舵取りで主要国は引き締めに転じても日銀の打てる選択肢は限られ、強い円の評価は本質的な再評価に見舞われています。120円近辺の水準は当面維持されるかもしれません、今後の動向は予断を許さず、ひいては日本経済全体に新たな要因として捉える必要性が高まっています。

本資料は、株式会社LOGOSキャピタルパートナーズ（以下「当社」という）が情報の提供のみを目的として作成したもので、当社が提供する情報は十分信頼に足るものと信じておりますが、それを保証するものではありません。ここに掲げる過去の実績は必ずしも将来の動向を示唆するものでなく、実際の収益を確約するものではありません。記載された見解等の内容は全て作成時点でのものであり、今後予告なく変更されることがあります。この資料及びここに掲載された情報等の権利は当社に帰属します。したがって、当社の書面による同意なくして、その全部若しくは一部を複製し、又その他の方法で配布することはご遠慮ください。